

人工知能は異常な速度で人間社会に進出している。将棋や囲碁など盤上競技では人間は完敗であるし、東京大学医科学研究所の医師が明確に診断できなかった患者の検査結果の情報を膨大な論文を蓄積したコンピュータに入力したところ、一〇分間の計算で診断結果と必要な投薬を提示した。その情報によって治療したところ、患者は完治し退院できた。

コンピュータが人間と同等の知能に到達したかを判断する「チューリング・テスト」という方法がある。密室の人間とコンピュータに次々と質問し、両者の回答がどちらのものか判定できなければコンピュータは人工知能を獲得したと判断するのであるが、二〇一四年には一四歳の少年同等の返答をしたコンピュータが出現した。

このような能力は社会に役立つことに利用されるが、意外な利用方法も出現してくる。情報社会では建物への出入り、料金の支払い、預金の引出しなど、日常生活で個人認証が必要である。現状では暗証番号など数値情報以外、指紋、掌紋、虹彩など個人の肉体に由来する生体情報の利用が普及している。その新顔が顔面情報である。

サラリーマン川柳に「ノーメイク会社入れぬ顔認証」という秀作があるが、現実には特殊な化粧をしても本人を確認できる一方、弱点も露呈している。アップルの最新のスマートフォン「アイフォンX」は自分の顔面情報を登録して利用するが、アメリカで母親の携帯電話が子供の顔面で解除されたという問題も登場している。

しかし、羽田空港では外国から帰国した日本国民の入国審査は顔面で本人の自動確認を実施している、今年度中に複数の空港にも導入される。東京五輪大会では選手だけではなく運営に関係する人々の総数が四〇万人にもなると推定され、その大量の人々の施設への入場や退場の管理を同様の方法で実施する予定である。

ここから派生してきた最新技術が「フェイシャル・プロファイリング」である。顔面による性格分析という意味であるが、目尻、口元、鼻頭など数十から数百の位置関係を分析し、人間の性格を判別する技術である。昨年四月にフロリダでトランプ大統領と中国の習国家主席の会食で、この技術が利用された。

アメリカの情報機関が習国家主席の多数の写真から、性格を「用意周到で慎重であるが、突然の事態には動揺する」と分析し、その弱点を利用して、トランプ大統領がシリアに多数のクルーゼングミサイル攻撃をしたことを突然告知した。突然の情報に習主席は一瞬反応できず、性格の弱点を世界に披露することになってしまった。

さらに技術は進歩し、性格どころか職業まで推定できる技術が開発されている。イスラエルの企業は二〇一五年のパリ同時多発テロ事件の直後、多数の写真からテロリストの可能性大の九名を特定したが、実際の一一名の犯人のうち九名であった。多数の参加するポーカー大会で、四名のプロのプレイヤーのうち三名も特定している。

指紋や虹彩などの個人情報が入国審査や犯罪捜査など特定の場合にしか採集されないが、膨大な監視カメラが設置されている現代社会では、本人の了解どころか気付かぬままに個人情報頻りに採集されている。G・オーウェルが半世紀前に監視社会の恐怖を警告した『一九八四』の世界が現実になりつつあることを理解して生活する必要がある。